

ヒットラーの「我が闘争」といふ有名な本を、最近僕ははじめて室伏（むろふし）高信氏の訳で読んだ。抄訳であるから、合点の行かぬ箇所も多かったが、非常に面白かった。何故、もつと早く読まなかったか、と思つた。やはり、いろいろな先入観が働いていたが為である。

ヒットラーの名は、日に何度も口にしながら、何となく此本には手を付けなかった僕のような人は、世間に存外多いのではないかと考える。

これは全く読者の先入観など許さぬ本だ。ヒットラー自身その事を書中で強調している。先入観によつて、自己の関心事の凡（すべ）てを検討するのを破滅の方法とさへ呼んでいる。

そして面白い事を言っている。さういふ方法は、自己の教義に客観的に矛盾する凡てのものを主観的に考えるといふ能力を皆んな殺して（しま）ふからだと言ふのである。彼はさう信じ、そう実行する。

彼は、彼の所謂（いわゆる）主観的に考へる能力のどん底まで行く。そして其処に、具体的な問題に関しては決して誤たぬ本能とも言ふべき直覚をしつかり掴（つか）んでゐる。彼の感傷性の全くない政治の技術はみな其処から発している様に思はれる。

これは天才の方法である。僕は、この驚くべき独断の書を二十頁ほど読んで、もう天才のペンを感じた。

僕には、ナチズムといふものが、はつきり解つた気がした。それは組織とか制度とかいう様なものではないのだ。寧（むし）ろ燃え上る欲望なのである。

ナチズムの中核は、ヒットラーといふ人物の憎悪のうちにあるのだ。毒ガスに両眼をやられ野戦病院で、ドイツの降伏を聞いた時のこの人物の憎悪のうちにあるのだ。

ユダヤ人排斥の報を聞いて、ナチのヴァンダリズムを考えたり、ドイツの快勝を聞いて、ドイツの科学精神を言つてみたり、みんな根も葉もない、たは言だといふ事が解つた。形式だけ輸入されたナチの政治政策など、反古ほご同然だといふ事が解つた。

ヒットラーといふ男の方法は、他人の模倣など全く許さない。

「朝日新聞」昭和15年9月12日

1) 黒字にした部分は、『小林秀雄全集』には収録されていないか、変更されている部分。



弾 光 曳

我が闘争

小林 秀 雄

ときへ呼んでゐる。

我が闘争」といふ有名な本を、
著者ははじめて、愛人、信氏の
手で讀んだ。拙識であるから、合
意の行かぬ箇所も多かつたが、
非常に面白かつた。何故、もつ
と早く讀まなかつたか、と思つ
た。やはり、いろいろな先入観
が働いてゐたが爲である。

ヒットラーの名は、日に何
度も口にしながら、何となく
此本には手を付けなかつた。偶
の逢ふ人は、世間に行方多い
のではないかと考へる。

これは全く讀者の先入観なぞ
許さぬ本だ。ヒットラー自身そ
の事を計中で強調してゐる。先
入観によつて、自己の関心事の
外を模倣するのを諷刺の方法

ときへ呼んでゐる。
そして面白い事を知つてゐ
る。さういふ方法は、自己の敵
義に客観的に矛盾する凡ての
ものを主観的に考へるといふ
能力を皆んな教して丁ふから
だと書ふのである。彼はさう
信じて、さう實行する。

彼は、彼の所謂主観的に考へ
る能力のどん底まで行く。もし
て其處に、具體的な問題に關
しては決して讀たぬ本だとも言
ふべき。讀むをしつかり讀んで
ゐる。彼の政治性の全くない政治
的知識はみな其處から發してゐ
る體に思はれる。

これは天才の方法である。
僕は、この驚くべき獨斷の體
を二十頁ほど讀んで、もう天
才のペンを懸じた。

が、はつきり解つた氣がした。そ
れは組織とか團體とか言ふ體な
ものではないのだ。寧ろ體上
る體なのである。

ナチズムの中核は、ヒット
ラーといふ人物の體のうちに
にあるのだ。毒ガスに體を
やられ野蠻病院で、ドイツの
降伏を聞いた時のこの人物の
憎惡の裡にあるのだ。

ユダヤ人排斥の體を離れて、
ナチのヴァンダリズムを考へた
り、ドイツの鉄血を離れて、ド
イツの科學知識を讀つてみた
り、みんな根も葉もない、たは
理だといふ事が解つた。形式だ
け輸入されたナチの政治政策な
ぞ、反當當然だといふ事が解つ
た。

ヒットラーといふ男の方法
は、他人の體格なぞ全く許さ
ない。